

ふじわらの かげ きよ

藤原景清と
坂手因幡守①

古川にある宝性寺の墓地の一角に、「景清堂」と書かれた三基の墓石を祀ったお堂があります。その景清堂の入口には、「藤原景清終焉之地」と自然石に刻まれた古い石碑が建てられています。

「藤原景清」といえば、日本史の中では平安時代末期の源平の争乱の頃に平氏に仕えて「平景清」とも名

乗り、「平家物語」にも登場する、「悪七兵衛」という異名をもつ武士がいますが、鏡野町に伝わる藤原景清の伝説には、次のような話があります。元禄四年（一六九二）編纂の「作陽誌」という地誌には、

「將軍義詮の頃に、因幡国（今の鳥取県東部）出身の筑後守藤原景清という人物が黒川村（古川の古い名称）を治めていたが、貞治六年（一三六七）の秋に敵対していた江見氏や村上氏らの豪族に殺害された。景清の母は、このことを悲しみ、袖測という測に身を投げて亡くなった。景清には跡継ぎはいなかったが、その一族の風戦居士という人物が景清母子を弔うた

めにこの地にお堂を建て、景清山宝性寺と号した。寺

の西南には母子の墓もある」とあります。また、宝性寺に伝わる縁起を要約すれば、

「足利二代將軍義詮の時代に、因幡の筑後守景清が黒川村を治めていたが、数々の軍功の恩賞として義詮から香々美庄方一里余町を恩賞として下賜された。しかし、このことを美作国内の江見氏・村上氏らに妬まれ、貞治六年の立秋に古川の北方にあたる岡坊で待ち伏せされ、殺害された。それにちなんでこの地を「因幡殿」という。景清の母は、子供に先だたれ、この世に一人で生きることとを嘆き、香々美川の測に身を投げて亡くなり、この測を往生測と呼ぶようになった。景清の一族である景明は仇討ちをすることをせず、敵の村上氏に降参し、剃髪して風仙居士と名乗り、お堂を建てて景清母子のために法華経を誦読して冥福を祈った。

す。残念ながら、このことを記録する当時の史料はなく、「作陽誌」も「宝性寺縁起」も後の時代に書かれたものであるため、事実関係を特定することはできませんが、古川の岡坊付近には、実際に因幡殿という地名が小字に残っており、昭和初期頃には旧国道付近に土盛の塚があり、旧国道を挟んで前述の景清終焉の地の石碑が立っていたそうです。しかし、この塚については、安永六年（一七七七）に書かれた「古川村銘細帳」という記録によれば、

「昔、因幡という武士がここで討ち死にして葬った所である。相手や時代はわからない」と、景清ではなく、「因幡」という武士にまつわる遺跡とされています。「景清」と「因幡」この二人は古川に伝わる伝承とどのような関わりを持つのでしょうか。

現在は因幡殿の塚もなくなり、石碑も宝性寺の景清堂へ移設されていますが、こうした実際に残る地名や、江戸時代には既にこのような話が伝わっていることから、単なる伝説ではない、何か根拠になるような事象があったのでしょうか。

参考資料：「鏡野町の文化財（旧版）」「鏡野風土記」、『鏡野の歴史史料集（一）』、『新訂訳文 作陽誌』
協力：景清山宝性寺

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733



景清山宝性寺



景清堂(左)と藤原景清終焉の地の石碑(右)



往生測付近

後に本堂を建立し仏像を安置して、景清山宝性寺往生院と号した」と、「作陽誌」よりも具体的に書かれています。双方の資料で、藤原景清は室町幕府二代將軍・足利義詮に仕え、貞治六年に殺害されているという記述から、南北朝時代の北朝方の人物であることがわかりま